

高校生向け講座「外国につながる子どもを教えられる教師になろう」の実践

—外国につながる子どもを教えられる教師を目指す高校生を増やすには—

河野俊之 (横浜国立大学)

1. はじめに

筆者は教員養成系学部に所属している。教員希望者の多くは、自身の小学校・中学校・高校時代に担当された教師をロールモデルとしていることが多い。小中高で外国につながる子どもに教えられる教師（以下、多文化教員）について視野に入っていることはほとんどないため、筆者の勤務先では、入学後、日本語教育専門領域（以下、本領域）の志願者は多くない。そこで、高校生を対象に、多文化教員について知ってもらうための公開講座を行うことにした。

2. 実施状況

公開講座の題目及び広報のリード文は以下のとおりである。

「外国につながる子どもに教えられる教師になろう—自分が教わったことがないことが教えられるか—」小学校などで日本語が不自由な子どもは急増しており、特に、地元・横浜、神奈川では顕著で、過半数を占める公立小学校もあります。あなたが教師になったとき、その子どもたちにきちんと教えられるでしょうか。自分はどうのように役立てるか、そして、どうしたら、さらに役立てるかについて考えていきます。

日時は、推薦入試の願書の納入が完了し、配布できる2018年9月9日(日)の13:00~15:00とした。定員は当初10名としたが、応募がそれをすぐに超えてしまったため、20名とし、追加募集を行った。このことから、多文化教員に関心がある高校生は多いと考えられる。

受講者は、高1、2、3、大学生、各、8、3、8、1名であった。静岡県1名以外は、神奈川県内高校所属または在住であった。

活動の流れは下のとおりである。()内は、公益社団法人日本語教育学会 文部科学省委託「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」で作成された「外国人児童生徒等の教育を担う教員・支援員に求められる資質・能力の内容項目」である。また、その下に、各活動の詳細と目的を示す。

1)外国につながる子どもについての課題 2)外国につながる子どもの現状

(①外国人児童生徒教育の考え方 ②教育コミュニティのデザイン ③外国人児童生徒等受け入れの現状と施策)

1)として、まず、日本語が不自由なことで授業が理解できなかつたり、いじめにあつたりし、友達ができず、同じ境遇の者に誘われ、犯罪に手を染めてしまうことがあることを講義した。次に、アメリカの小学校の授業風景の動画を見せ、ほぼ理解できないことを実感させた後に、日本語教育を行うことは、上のような犯罪者を減らすことが目的でないことをダイバーシティの観点から講義した。2)として、外国につながる子どもが全国、及び、地元・横浜で急増しており、今後、さらに増加することを講義した。次に、横浜市内の外国につながる子どもが過半数を占める横浜市立小学校に関する動画を視聴し、現状、課題について講義した。これらにより、現状・課題を知ってもらい、受講者に多文化教員について興味を持ってもらうことを目的とした。

3) BICS、CALP、及びCF、DLS、ALPについて

(19) 言語能力の把握)

まず、受講者自身が学んだ英語教育で重要視されていた文法等について、日本語教育でも学ぶ必要があることを述べた後に、BICSとCALP及びCF、DLS、ALPについて講義した。次に、言葉とは単なるコミュニケーション・ツールではなく、その人そのものであることを述べた。さらに、以降の活動について、多文化教員としての能力を付けるのが目的ではなく、楽しいかどうかを基準とし、楽しいと思えば素質があり、将来、本格的に学ぶことで能力が付くことを述べた。これらにより、外国につながる子どもに必要な言語能力を知ってもらうことと多文化教員としての自分の資質について考えてもらうことを目的とした。

4) 初期指導

(16) 日本語に関する内容 (17) 日本語指導の理論と方法 (18) 個別の指導計画の立て方)

本領域では、成人に対する日本語教育も扱っている。それは外国につながる子どもへの日本語教育では、特に初期指導に役立つと考えている。そこで、初級文型について外国につながる子どもがサバイバル日本語としてそれらを使用できるとよい場面を考える活動をグループで行った。その後、本来は、場面から指導すべき文法等を考えるべきであることを講義した。

5) 教科指導

(20) 教科の内容 (21) 在籍学級での支援)

まず、「健康」を小6に教えるなら、どのように授業を進めるかを考えさせた。次に、教師の説明を先行させるのは必ずしも有効でないことを示し、JSLカリキュラムを紹介した。多文化教員として、初期指導、教科指導の両方ができることが重要であると筆者は考えている。

6) 多文化教員の能力

(15) 自己の成長、環境づくり)

本領域では、小学校教員免許取得が卒業要件である。本領域で学ぶことは、国際教室担当でなく、一般教員でも大いに役立つことを述べた。

7) 入試説明 8) 大学生活

7)として、本領域では、推薦入試において入学定員が確保されているので、ぜひ志願してほしいと訴えた。その後、本年度推薦入試で入学した1年生に受験勉強の方法について、また、8)として、大学生活について述べてもらった。

3. 振り返り

筆者は時間配分を除き、ある程度の満足感を得ていた。筆者と大学がそれぞれ作成したアンケートから、概ね好評であることが分かった。また、受講者は初対面であることが多いため、グループ活動は少なめにしたが、協働的であった。しかし、それについて、「話し合いが苦手なので緊張した」「もっと議論させてほしかった」の両方のコメントがあった。

その後、推薦入試を受験してくれた受講者もいた。

4. おわりに

今回、時間の都合でカットした部分もあるので、時間配分も含め、内容を精査する必要がある。また、様々な障壁も予想されるが、筆者だけでなく、多文化教員やほかの大学教員、研究者とともに講座を行うことで、より現場に則したものになると考えている。